

ポリフォニックなリズムが織りなす音の色合い

ー即興演奏をやってみようー

音楽家 片岡祐介

松本: 定刻になりましたので、生活美学研究所の定例研究会を始めさせていただきます。大変お寒いなか、またお忙しいなかお越し頂きまして、誠にありがとうございます。本日は待ちに待った講師をお招きしての定例研究会を開催させていただきます。まず簡単に講師のご紹介から始めます。すでにもうスタンバイして下さっていますが、音楽家の片岡祐介先生です。1969年生まれ、少年時代に即興音楽に目覚め、木琴のデタラメ弾きを始められました。そして音大の打楽器科で主にマリンバを学ばれ、中退されて、プロの演奏家としてご活躍です。おそらくEテレをはじめ、様々なメディアを通じてご存知の方もいらっしゃると思います。「あいので」という番組の中で「黄色のあいのでさん」として出演、また近年では学校や障害者施設などで音楽セッションや歌づくりのほか、ピアノの即興連弾も多数行っておられます。非専門家のどんな表現も受け止めて音楽にしまうのが特徴です。

ご著書は野村誠氏との共著による『即興演奏ってどうやるの』など、いくつかありますけれども、ご著書は、本学音楽学部における音楽療法の専門教育科目として「楽器・合奏指導法」という授業があり、その中でバイブルのようになっております。特に障害児をはじめ、子どもから大人まで、幅広く楽しめる即興演奏が盛り込まれています。今日も実際に演奏するワークがあるので、こちらも楽しみにしております。

それからもう一方、本日は指定討論者として立命館大学の総合心理学部教授の森岡正芳先生もお招きしております。ご専門は臨床心理士でいらっしゃいますけれども、森岡先生は臨床の現場のなかで人と人との関係性のなかで、「間」について造詣が深い先生でいらっしゃいます。音楽療法の臨床のなかで即興演奏したり、またどなたでも楽しめる即興演奏のなかで、そういった「間」についてのお話を、後ほどパネルディスカッションでもしていただけないのではないかと思います。それでは、長々とお話しても時間が勿体ないと思いますので、片岡先生のご講演に入らせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

片岡: 片岡です。よろしくお願いします。今朝、東京から来たのですが、雪が心配でしたが大丈夫でした。ちょっとだけ遅れたけど、動いていました。

先程紹介されたとおり、僕は音楽家です。いつも完全に即興でやるんですよ。音楽も、こういうしゃべる時も。なので、何も考えていなくてですね、皆さんの顔を見ながら考えようかなと思っているんですよ。いきなり質問とかしてくださると、とても嬉しいです。僕の話の遮ってでも。僕は障害がある子どもさんとか、色んな施設とかであ

きれるほどたくさん音楽をやっているの、今これをやろうと思っても「先生、先生！」ってくるとか、止まらなくなっちゃう子がいるとか、そういうダーンッと来られるのが大好きなんですよ。むしろそのことによって動いていくというところもあるので、今日みたいに椅子に座られていると…。僕一人として何かを強く主張したい、伝えたいというのが、あまりないんですね。えっとね、僕は打楽器が専門なんですよ。打楽器って、国によって、ジャンルによっても違うけれどわりとやっぱり脇役というか。オーケストラなんかみているとよくわかると思いますけど、なんか最後にちょっと「胡椒ふる」みたいな。「ごま油ひとまわし」みたいな感じで「チリン」、とか「コン」とか「シャー」みたいな、そういうのですよ。だから、個人的にはキャラは弱い。何かあるところに「コン」と入れようかな、みたいなそういう感じです。ですから誰かがどんどんメロディをやっていただけるとありがたいなと、僕は「コン」とやるだけなんで。

僕はたぶん、日本人のなかでは変わっていて、音楽を全然習わないところから始めたんですね。そのへんにあるものを適当に叩いたりして、ブラジルとかアフリカとかいくとそういう人のほうが多いんですけど。なんとか教室、ピアノ教室みたいなところにはいないです。兄が習っていたので、家にピアノがあったのでデタラメ弾いていました。そういう感じだとやっぱり打楽器奏者になるのかな。なんていうのかな、音が好き。音楽というより音が好きなんです。

〈周囲にある家具や機器などを叩きだす〉

こういうことを小学校 5 年生くらいの時から始めて、最初親が相当不審がるんだけど、だんだん慣れてきたみたいで、皆がごはん食べてる横でこうトントントントン…とやっている、みたいなそういう感じです。

今日はこの講演の後、(別の催しで)皆で楽器を鳴らしてあそびましょう、ということでこんなにたくさん楽器も用意して頂いてますが、講演のなかでは僕の実践として、僕がいっぱい音楽をやっている現場のものを聴いてもらうのがはやいかなと思います。

〈映像〉

時間が足りないの、飛ばし飛ばし、古い順で。これはだいぶ前の映像です。岐阜県の文化施設みたいな所で、楽器ぶちまけた状態で、僕はなんとなく一日中そこに居て、こうして音楽が始まったり、始まらなかったり…。

あ、ここ面白い。鍵盤ハーモニカ三重奏。このメンバー(小さな女の子二人と片岡本人)からは想像もつかない、武満徹みたいな音楽です。

〈映像〉

リズムマシーンを登用してみました。バンドのお兄さんにも来てもらいました。

〈映像〉

これは、天井に網付けてそこに鈴を付けています。引っ張るだけでシャカシャカ鳴ります。

〈映像〉

(映像を流しながら、ダンボールを取り出し何かを作りだす)

今、映像を流しながら聞いていて、音が悪いですね。まあ、悪いというまでではないですけど。それで実は今日、スピーカーを作ろうと思って持ってきていたので、作ってしまいました。このタイミングで作るとは思っていなかったんですが。

「一体なんやねん」と思われてるかもしれないですが、このスピーカーが僕の今やっていることのなかで一番旬なものなので、せっかくですので紹介します。そして今日の「^音間」の話とか、音そのものの話とかなり密接に関係があります。

松本：ぜひ、説明をお願いいたします。スピーカー、ものすごく気になりますね。

片岡：松本先生、よかったらこちらに聞き役としてお越しく下さい。

松本：私の耳で大丈夫でしょうか？

片岡：聞き役というか、質問というか。

松本：あ、はい。

片岡：これは僕が、去年の5月に、ひよんなきっかけで発明した純セrebsスピーカーです。

松本：セrebsというのはセrebsレティのセrebsですか？

片岡：はい、そうです。

松本：そしてじゅんは「準じる」とかの準ではなくて…

片岡：「純粹」の純です。

松本：「純粹」の純ですか。由来をお聞きしたいなと思いますが。

片岡：そうですね。僕はあのね、純セレブなんです。

松本：あ、そうなんですね？

片岡：はい。僕と最近、共同で色々と研究したりしている東京大学の安富歩という先生がいるんですけども、あの方が僕を純セレブと命じたんですけどね。どういうことかと言いますと、僕がフェイスブックとかに、ふざけたエア一金持ちネタみたいなのを投稿しているんです。

松本：エア一金持ち…金持ちではなく…？

片岡：ええ。あの関西で言うと、上沼恵美子さん。「このドレス高かったんです」みたいな。

松本：「淡路島にお城がある」とか。

片岡：そうそう、そういうネタをね。例えば「有名イタリア料理店でディナー中」とか言って「サイゼリヤ」だったりね。

松本：(サイゼリヤは) リーズナブルなことで有名ですけど。

片岡：そうそう。あとは「このコーヒーカップは真っ白で、とっても高貴な感じがするから、たぶんマイセンだ」と言って、本当はニトリで買ったものなんです。そういう風に勝手に、自分は大金持ちで優雅な生活をしていると思いついて、そういうネタをやっています。

松本：でも、音楽では思いついて大事な気がします。

片岡：そうそうそう。僕は思いつきがとっても得意でしてね、やっていると本当にそんな感じがしてくるんですね。それってたぶん、僕の特性のひとつで、まあもちろん、金持ちネタは冗談でやっているんですけど、音楽やる時も例えばモーツァルト弾く時はこう、なんだか弾いてるだけで髪の毛がカールしてくるような感じでね。

松本：ああ、それをすごく思い知らされている学生の集団があそこにありますね。1年生です。この前テストを終えたばかりでして…

片岡：ああ、モーツァルト？

松本：はい、打ちひしがれていると思います。

片岡：そうなんですね。それで、この純セレブというこのスピーカーの発明前の話なんですけど、そういう思い込みネタをやってしまして。セレブ、セレブレティって英語では有名人と訳すのかな、金持ちはあんまり関係ないんですけどね。

松本：でも、「セレブ感」とか言いますよね。

片岡：ええ。日本語でセレブっていう時の、なんかこう「叶姉妹」みたいな、無駄に豪華な感じ。そっちの、日本語のセレブなんですけどね。それで、純セレブっていうのがセレブであるために何の根拠もない。普通は実際に家が金持ちだったり、家柄が良かったりすごい有名だったりすることがセレブなんだろうけど、純粋なセレブなので思ってるだけっていう…

松本：思ってるぶんにはタダですもんね？

片岡：そうそう。だから僕みたいな貧乏ミュージシャンであればあるほど、純度が高いわけです。

松本：純度が高い…

片岡：何の根拠もないわけですから。ええ、そういうわけです。

ということで、その純セレブの名を冠したスピーカーがこれなんですけど、僕と組んでいる安富歩さんという人が、ある時新車を買いました。そしたら、車に付いてるカーステレオの音が気に食わなくて、何か別のスピーカーに付け替えたんですね。そしたら車屋さんが、取り外した純正スピーカーユニットを「これじゃあ、捨てときますからね」って言ったらしいので「え？ちょっと待って、捨てるの？」ってなって、僕にその写真を撮ってメールで送ってこられたんです。それで「片岡君、なんか電子工作とか、音の工作してたよね？使う？」って言って。僕はカーステレオのスピーカーは別に興味ないなあと思って、「要りません。」って返したら、「じゃあこれはアンプにプラス・マイナスでつないだら音が出るのか？」って言うので「ああ、それは出ますよ。やって

みたらいいんじゃないですか？」って。でもあの人は工作苦手だろうなあと思ひまして。まあ、僕も凝った工作は苦手なんですけど。それで「たぶん、ダンボールに穴開けて、ボコっつつこめばいいですよ。」って言ったんです。箱は絶対必要なんです、スピーカーというのは。スピーカーユニットだけだと、すごいショボい音になるんです。だけどそれやると、箱の中でやな残響というか、箱が鳴って変な音がするから、「箱の中に紙くずをいっぱい詰めてください」と言いました。紙は出来れば色んな種類の紙くず。コピー用紙とかティッシュとか新聞紙とか。「適当にくしゃくしゃにして詰めてください」と。でも僕は実際にそれをやったことはなかったんですけど、小さい頃からこうやってモノを叩いているので大体わかるんですよ。この構造でこうなっているから、こういう音が鳴っているんだろうな、ということが。

松本：経験値から？

片岡：経験値から。そうしたら、その日のうちに彼がやってみて、「なんか知らないけど、すごい音してるぞ！」ってなって。「そうなの？そんなにいいのかな。」っていうのがきっかけなんです。でも初めて作ると、音が出ただけでも嬉しいですから、そんなものかなと思っていたんですが、実際に後でほんものを聴いてみると本当に良くてびっくりしました。それで、どうやらこれは何か秘密があるな、いわゆるオーディオメーカーの人達がこれまでに全く考えてこなかった、逆の完全なイノベーションだという気がしてきたんです。なぜイノベーションかということ、普通のオーディオでやっていることの正反対なんです。

松本：そうなんですか？

片岡：普通の高級なオーディオっていうのは、重い方がいい。しっかりと留めてある方がいい、こういう枠のところとか。つまりがつつり安定させた方がいいんですね。そしてこのスピーカーの振動部分だけを調整できるようにするってことなんですけど、これは超適当でしょ？今作ったくらいですから、穴開けてズボッて入れて。

松本：しかも、なんか適当なダンボールで！

片岡：ええ。それであんまり、ちゃんと固定もされてなくて軽いですね。これはどういうことかと言うとですね、スピーカーに限らずだと思うんですけど、色んな工業製品や、あるいは工業製品に限らず、我々の発想というのはつい、何か物事を制御しようとするんです。制御にまた制御を重ねて。だからさっきの子どもさん達とやっていたやつって、あんまり制御していないでしょ？

松本：そうですね。自由にやっていました。

片岡：ええ、自由にやっていて。だけどそこで何か始まったら、それには乗っていくんですけど、「はい、集まって。これやってね。」という風にはやっていませんよね。それで僕は制御の悪い例として吹奏楽の指導なんかを上げるんですけど、「ああ、そこちょっと速い。それはちょっと遅すぎ。」とか「大き過ぎ。ああ、今度は小さ過ぎ。」「音程がちょっと高い。ああ、低過ぎる。」とか。そんなことやっていて、いい演奏になるわけなのでしょう、っていう。どんどんどんどん型にはめられていきますよね。だからその人の持つ個性とか、何かその時の状況とかそういうものが、そのままサラッと出るように。モノでもそういうことが通用するというか。

松本：（スピーカーを指しながら）これは、あそびがあるんですか？

片岡：ええ、あそびがあります。あとね、このスピーカーユニットももちろん高いのも安いのもいっぱいあって、いいものも悪いものもあるんですけど、大体いやな音にはならないです。個性は出るけど。

ちょっと鳴らしてみるか、まだ紙を詰めていない状態ですけど。スピーカーの話だけに終わらせたくないんです。でもこれを僕がなぜ思いついたかというのが、やっぱりこどもの時からモノをよく叩いていたということが一つと、ありとあらゆる障害のある方やお年寄りの方とセッションを続けているということが大いに関係があって…。そういうコントロールしない、し過ぎないってこととか…。

松本：確かに、制御しようとしても聞いてくれる人達じゃないですからね。

片岡：そうそう、言う事を…いや、ほんとはね。どんな人も言う事は聞かないはずなんですよ。なぜか、表面上聞いてくれたりするんですよね。

松本：はい。

片岡：紙を詰めていない状態でも、そこそこいい音はする。

（スピーカーから音楽が流れる）

（その間もスピーカーに紙を詰め続ける）

松本：なんか、うそみたいにいい音がしているんですけど、仕掛けがあるんですか？

片岡：仕掛けは、僕にはよくわかりません。（段ボールスピーカーを指して）このヒト達がやっていることなんで。僕は制御はしていません、ほとんど。ちょっとした…なんかあるんですけどね。紙をどれくらいのクシャクシャ感でいくとか。それを聴きながらやるんです。

松本：聴きながら…

片岡：これこないだ、秋葉原の高級オーディオ店、何百万もするスピーカーとか売ってるところへ行って、色々順番に聴いて「勝ったな」みたいな感じで。

松本：本当ですか。

片岡：まあ、身びいきも入っていますが勝ったなと思いましたね。はい。

松本：また、この会場にぴったりの音のような気がしますけれども。

片岡：えっとね、それはですね。そんなことは、本当はないんですけど。

松本：あ、そうなんですか。

片岡：意外と強いです。会場との相性とかにあんまり左右されない。

松本：そうなんですか。では、それこそ身びいきでしたね。

片岡：えっと、つまりその、ここを押さえてここをなんとか吸音して、ここをあれして…とかやっていると、どんどん音がひずむので、まっすぐポーン…と、ファーンと飛ばなくなるんですよ。で、スパーンと飛ぶ状況だと、まあこの部屋そんなに音良くないと思うんですけど、音が変な反射をしやすい場所でも、負けずに普通にまっすぐ飛んでいくということがあります。

松本、そういえばこの前、すごく演奏しやすいライブハウスがあって、音響の専門の方に理由を聞いたら「まずはフラットにすることです」と言われました。

片岡：それはそうです。えっと、こういうコンクリの建物が西洋のクラシックのホールとか、教会とかに比較的近いとすれば、あるいは、普通に売られている BOSE とかのスピーカーに近いんです、この箱（会場）は。だから箱の中で人工的に低音が発生したり

しているわけです。それでこれ（段ボールスピーカー）は、古民家みたいなものです、日本の。障子とかのある。

松本：ああ、紙で出来ていたり…

片岡：そうそう。古民家とかは音がだだもれなんですね。障子とかを多少震わせつつ外に出るという。で、中でこもらせて、録音ソースの中に入っていない音をここで発生させるんじゃなくて、録音ソースの音が素直に鳴って、このへん（段ボール箱）全体にも伝わって、無指向性に広がっていくっていう。

松本：だから柔らかく感じるんですね。

片岡：そうそう。だからこれ（スピーカーユニット部分）だけの良さを普通は考えちゃって、あの何て言うんですかね、『マイクにだけ言う』みたいな。『スピーカーだけから出す』みたいな。そうじゃなくて、付かず離れずでくっついているこのヒトたち（段ボール箱）に音が伝わって行って、四方八方に広げてくれているということなんですけど。

松本：いいですね、付かず離れずの関係なんですね。

片岡：はい。だからこれはたぶん、自然の状況に比較的近い。虫と草と何かがまあ、付かず離れずで影響しているという、そういう生態系的なところがあると自分では思っているんですけど。

さあ、このへんで、質問はないですか？

来場者1：中はどんな感じなんですか？

松本：スピーカーの中の感じですね？

片岡：ああこれね、見て頂いてもいいんですけど、まあ変わるんでね。あの、色んな諸条件によって。（段ボール箱を開けて）こんな感じですね。それでも、本当は新聞だけじゃなくて別の紙ちょっと入ったほうがいいと思いますけど。

松本：広告のような？

片岡：ええ、材質の違うもの。つまり定在波っていうんですけど。

（段ボール箱の側面をボンボンと叩く）

音程を持てますよね？木の箱だとなおさら音程持ってるんですよ。固有の音程を持

っていると、それがAの音だったらAの音だけ急に大きくなります。そういうのを避ける為に、色んな特性を持った、表面の艶とか硬さの違うもの入れてやることで、まあ大体ナチュラルになっていくということですね。だから、この中を生態系にしてあげなきゃならないんです。

松本：なるほど。

片岡：これはまるで福祉の話で、多様性がいかに大事かということです、はい。

松本：それを、普段色んなものを叩きながら体得されたんですか、先生は。

片岡：はい。まあ体得したというか、やっぱり子どもや障害がある人と一緒に音楽をやっていると、そういうことだよなと学ぶことに結果的になりますよね。

何か他に質問はないでしょうか？じゃあ、音が良くなったところでまた映像を観ましょう。これはわりと最近ですね。東京の特別支援学級で、子ども二人と僕の即興。

〈映像〉

片岡：これはまあ、聴いたらわかると思うんですけど、鍵盤ハーモニカがたぶん僕です。覚えてないけど、大人っぽいですよね。で、この木琴をコンッ！みたいなのが子ども達です。これすごい面白いなと思って。えっとね、打楽器ひとつ取っても、僕は中退したけど音楽大学で打楽器科をやっていたんですけど、大体打楽器文化とクラシック打楽器文化というのがあってですね、マリンバとかをこう…（しなやかな手つきでマリンバを叩く身振り）こういう感じ。まあ、そういう音楽は別にいいんですけど、こういうコンッ！っていうのはないんです。だけど子どもと一緒に共演してて、こういうものを自分の身体のなかに入れていくと、最強のミュージシャンになれるなと思って。だから僕は、施設に行ったり学校に行ったりする活動は、自分の修行の場というか、めっちゃ厳しい「口では教えてくれない大師匠」がいるっていう感じですよ。コンッ！今のどうやってやるのかな…みたいな。だけどそういうのを色々身体のなかに入れていくと、現代音楽とかやる時にね、固定されたカルチャーのなかに収まるんじゃないくて、すごい色んなことが出来るんで。飛び上がりながらパンッ！ってやろうとかね。まあよくあるのが、施設とかに行ってるのに、自分の音楽を全く変えないという人もいますよね。「はい、歌いましょう。歌いましょう。」って。その感じちょっと違うんじゃないかな、みたいな。だからまあなんか、セラピーとか指導とかいうよりは、まあ留学に行くというか、障害者文化を学びに行くみたいな。そんなつもりでやると色々双方に面白いことがあるんじゃないかと思います。

松本：むしろその方が本質的だったり、音楽するっていうことに繋がるんでしょうか。

片岡：ええ、生きてるって感じになるんで。じゃあ、次は…

松本：本当にいい音になってびっくりします。臨場感がありますよね。

片岡：あるでしょ？

松本：はい。

片岡：じゃあ、せっかくいい音になったのに、ちょっとワルい音の音楽を。

〈映像〉

片岡：これは静岡県浜松で、子ども達とやったバンドです。これ、このカメラ誰かが勝手に撮っててね、まあ、子どもの誰かだと思うんですけど。

松本：すごいですね。かなり前衛的なロックを聴いているような表現だなと思って。

片岡：はい。ここは浜松のクリエイティブサポートレッツっていう、現在は施設やっているけど、当時は障害のある子どもの為のアート教室みたい場所だったんですけど。そこで定期的にワークショップをやっていて、当時、最初小さい打楽器とかで遊んでいたんですけど、なんかその、彼らの表現が民族楽器みたいな洗練されたものよりも、もうちょっと、初期衝動的な、パンクロックのようなテイストを感じたんですよね。そのへんの木琴とかで遊んでいたけど、出てくるものが洗練じゃない方の衝動だけでやる感じ。それでじゃあ、バンドやろうってことになって、しかも固定メンバーでいくぞ、と。毎回変わるんじゃなくて。バンドやろうぜってチラシ貼ってですね、その施設内に。それで僕も、さっき映像でドラム叩いてましたけど、ハードオフに行ったらエレキギター買ってきてですね、ギター弾けないんですけど。

松本：ああ、ハードオフで！

片岡：そうそう、安いやつ買ってきて、とりあえずかき鳴らしちゃえみたいな。出発点と同じ方が面白いなと思って。でも楽器も結構、みんな交代しながら、なかなか担当楽器が決まらないんですけど、いま見ていただいた映像は、やって3回目くらいだったんですよね。3回目くらいですでに、あの何も決めずにでたらめにやってるんですよ。

完全にでたらめにやってるんです。なんだけど、最後に出てきたボーカルの男の子とかも、あれは何か既成の曲らしいんですけど、だけど何かよくわからないんです。トゥー トゥトゥトゥー、 トゥトゥトゥーって、しかもマイクを口の中に入れてしまってる。

松本：そうですね。

片岡：そうすると、マイクが何回かやっていると壊れるという。一番安いマイク探してきて、これはもう、こうしないと出ない音だから良からうということ。そうするとトゥー トゥトゥトゥー、 トゥトゥトゥーのトゥトゥトゥーのところダダダダンッ（側にあった箱を叩く）とみんなやったりするんです。そういうこう…なんかパンクロックとかもそういう作り方してたんじゃないかと思うし、ビートルズとかもそうですね。なんかこう持ち寄って、「俺これしか弾けないんだけど」「俺はこのリズムしかできないんだけど」とか言ってやってるはずなんです。で、やってるうちにうまくなくなっていきます。楽しいから。

松本：まさに、音というか表現…バンドでの表現が生まれる時、みたいな感じなんですか。

片岡：ええ、そうですね。

松本：でも、片岡先生も大概冒険しておられますよね。はじめは先生どこかな？って探すくらい、溶け込んで…

片岡：ああ、はいはい。よくありますね。そういう施設に行くと、まだ先生が現れない…あ、この人だったのか！（一同笑い）

何か質問ないですか？

松本：いかがでしょうか…ああ、どうぞ。何かすごく質問したいという雰囲気を感じましたけど。

片岡：よく読み取れますね！（笑い）

質問者 2：今のところ、先生が何も決めないところで始まるとか、仕上がりというか、先どうなるんだという不安とか、何か形というか押さえておくもの、時間だったり「これをしました」という記録というものが残らないかもしれないという不安を抱えなが

らされているのか、時に任せるというのか…。案内にあった「勇気のある方集合」ってそういう意味だったのかなって。勇気はいりますか？

片岡：ああ、勇気はねえ。いるかもしれませんがね。僕がこういう活動を始めた頃は、だんだん忘れてきたけど、もうちょっと普通に安泰なやり方をしていた気がしますね。要するに子ども達がみんな振る楽器を持ってて、僕がジャンベ叩いてリズム合わせたんだとか、だんだん速くして行ってバンッて終わるだとか。でも僕はやっぱり飽きっぽいんで、どうなるかわかってることやってもしょうがないし。で、後ね、音楽にならないってことはまずないですね。何を音楽とするかってことはありますけど。後はその、すごい気まずい感じでなかなか音も出してくれないってことがあったとしたら、僕はそれを初めてのデートって呼んでるんですけど、すごいいいじゃないですか？（笑い）そういうのって打ち解けちゃうともう起きないんで。その時間をとっても楽しんで、大事にした方がいいなと思って、一緒にモジモジする。あるいはみんながバンバンバンッてデタラメ叩いて収拾が取れないみたいになった時は、それは、いつかは終わるから大丈夫。寿命はあるし（笑い）大体大丈夫ですね。ただ、よくそういうワーストカオス状態になった時にそこにいる責任者の人、学校の先生だったり施設の人だったり不安になってくるってことが多いです。あるいは、僕もその責任者であるわけですよ。音楽やりにきてるわけですから。だけど、その責任者が出来るだけ無責任になるっていうか。安全面とかもちろん大事なんですけど、その音楽がどうなるかまでは責任取らなくていいんじゃないの？みんなでやってることだしって。あと、お花見とか宴会と一緒にワーストと盛り上がりつつもそのうちなんかこう、「俺明日1限あるから帰るよ」。（笑い）要するに同時に終わらなくてもいいんですよ。そういうことはありますね。

松本：ということは、今すごく本質的なご質問を頂いたと思うんですけど、先生は現場に赴かれる時は、いわば丸腰の状態なんですか？

片岡：はい。

松本：すごいですねえ…

片岡：それで、モノを持って行かないことが多いです。まあでも、今日みたいにモノがあるところだったら「こんなにあるから使おう！」ってなるし、何もなかったらボディパーカッションとか身体だけでやったり、そこにある日用品を使って叩いたりした方が「本日のスペシャル」「シェフの気まぐれ音楽」みたいになるので。冷蔵庫開けて何作ろうかな、みたいな。

松本：ああ、その方が、特別感がありますよね。

片岡：ええ、要するに持ち込めば持ち込むほど、それを使う為の自分が慣れ親しんでいるやり方というのがすぐ出てきてしまうんですよ。その方が安心かもしれないけど、面白いかどうかというと、また別なんで、はい。

松本：実は今日の会場の椅子なんですけど、これ机が付いていて。この机もしかして打楽器とか使う時に邪魔ですか？って聞いたら、「あ、いいね」って言って下さって。むしろ楽器が内蔵されているみたいでいいねと。

片岡：はい。これはやっぱり、僕が思ういわゆるアートなんです。つまりその「椅子じゃなくて楽器かも」っていう。認識を変えてみるということです。だからそれは、子どもさんやお年寄りと音楽やる時も「この人なんかジューッと黙って車椅子に座っているけれども、もしかしてもものすごい芸術家かも？」って。僕、思い込むの得意なんで。

松本：純セレブ。

片岡：純セレブなんで。そうすると、共演者もそのような様子を示してくるんです。だからそういう、認識を変えていくっていうことが僕にとってはすごい大事だなと思ってます。

松本：そうですね。まさに現場の中で何か発見できる時って、そういう時なのかもしれないですね。

片岡：ええ、だからそれはね、何かを予定しておいて「このプログラムをなぞろう」としていると、タナボタを拾うことができなくなっちゃうんです。何も用意せずに臨めば、見たことない風景に出会えますが、「ちょっと今、これをやることになっているので」ってしてると知ってる感じのことばかりになってしまっって、ぼこぼこ色んな所にぼた餅が落ちてるのに気づかないことになっちゃいますから。

松本：返って予定調和に気を取られている間に、宝物を逃しているかもしれませんよね。

片岡：そう。まあ、なりがちなんですけどね。自分も憶えがあります。やっぱりそれは、責任感、義務感っていうのは良くない。何かちゃんとしっかりしたものをやり遂げなきゃいけないと思っていると、実質的なことが何もできなくなるので。

松本：そうですね。では、この後のパネルディスカッションでも映像を流したり、自由にやっていただければと思います。定例研究会はこれで終了とさせていただきます。片岡先生、ありがとうございました。

(2019 年 2 月 9 日、生活美学研究所第 4 回定例研究会における講演に基づく)

コーディネーター 武庫川女子大学音楽学部准教授 松 本 佳久子

指定討論者コメント

立命館大学総合心理学部教授 森 岡 正 芳

即興とリズム

片岡さんがワークを通して示されたことは、心理社会支援に共通する勘所でもあった。まずワークの始まりに注目。参加者の期待と好奇心と不安のなかから起きてくることをつかまえる。既存のプログラムを持ち込むのではなく、その場にある素材を使って、その場で作る。こちらが何か用意することでかえって、今ある素材を受け取りそこなうという。素材は散らばっているほうがよい。その方が表現の可能性も大きいのだ。

片岡さんのワークは、表現が生まれるその瞬に焦点が当たっている。洗練される前の「原石」を生活の場の中で取り出す。既成の音楽よりずっと面白い音が施設や保育の場にあるという。それを受け取って返す。リズムはすでにそこにある。その場が音楽になっていく。自分を開けておき、カオスの中に方向性が少しずつ感じられるまで待つ。これが即興への秘訣である。他の人の音を大切に聴く。すると次に生じる音によって、時空の密度が変わってくる。得難い体験だった。